

Title	大野英二著 ドイツ資本主義論
Sub Title	
Author	常盤, 政治
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1966
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.59, No.2 (1966. 2) ,p.217(107)- 218(108)
JaLC DOI	10.14991/001.19660201-0107
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19660201-0107">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19660201-0107</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

最後に、結章都市発展の要因とその構造が、編者の山鹿博士によって書かれているが、これは前章に展開されたいくつかの理論、実証を総合する、いわばシンセシスにあたるものであると考えてよい。

以上、本書の内容について紹介したが、一口に言って、本書は小冊子であり乍らかなりよくまとまっております、その限りで有意義な作業といえることを強調したい。しかし乍ら、誰にも容易に指摘できることは、本書の前半、即ち理論の部と後半実証の部との不連続性であろう。成程、第二章に示されるエコノミックベース、第三章に示される種々な都市構造の模式は、実証の部でもしばしば引用され、実証の下敷きになっているが、かんじんのアロンゾの理論や所得決定の理論は後半では全く触れられず、この点の不連続をどう解釈したらよいか、多くの読者を途惑わせるものがある。いうまでもなく、これは理論畑の研究者は実証に弱く、フィールドワークに従事している者は必ずしも理論に強くないという周知の事実にもとづくものであるが、それと同時に協同研究というもの自体にわれわれがなじんでいない結果でもあろう。本来協同研究は、ことなつた知識体系、研究方法をも

つた者が集まって相互に意見を交換し、そこに独自の研究成果をさがし求めるといふ研究過程であつて、その結果はいくつかの異質な内容の並列であるべきではなく、むしろ有機的の一体となるものであろう。この点、この研究グループは年齢も若く、その統率者として山鹿博士という学識人格ともに信頼できる存在をもっているのがなによりも強みであり、今後よりよき成果を期待できるものと確信している。(明玄書房・昭和四十年十月刊・A5・二四二頁・六五〇円)

—高橋潤二郎—

東畑精一 監修  
高橋泰蔵  
金融経済研究所編

### 『明治前期の銀行制度』

—日本金融市場発達史I—

本書は、数年来金融経済研究所がおこなつてきた、日本金融史にかんする共同研究の成果の一つであり、明治初年から二〇年代ぐらゐの時期までが扱われている。この共同研究は、今日のわが国金融市場の特殊性よりする固有の問題点の解明をめざして、それを歴史

的にあとづけようという展望のもとにおこなわれており、その成果が当初より期待されていたものである。わが国の金融史(日本資本主義の発展と金融構造)研究は、すでに永い歴史をもち、戦前は幕末期から維新期の幣制を中心とした研究がさかんであった。しかし、金融の一つの構造として把握し、その歴史の展開を、日本資本主義の歴史の推移に於いて解明しようとする意図は、戦後のことに属しており、未開拓な分野であるといふことができる。近年金融史研究がとみにさかんなつた理由の一つは、戦後の日本資本主義の発展のうちにおける金融の特異な構造(過度の間接金融偏重)の由因を明らかにしようという意図からであらうし、また、いまますこし広範な問題意識としては、資本主義(とりわけ国家独占資本主義)における金融関係の役割の評価というような点にも帰することができよう。したがって、その研究方向も多様であつた。本書の筆者の一人、渡辺佐平氏によれば、その方向は三つに区分されている。その一つは、農業経済(II地主制)関係からみた金融把握、第二に、経済史的に日本資本主義の特殊性にかかわらしめるもの、第三に、金融経済学的把握。

本書は、その共同研究的性格からして、これら三つの立場の総合のうえになりたつているといへよう。むしろ、統一的な叙述ではなく、二つの論文から構成されているにしろ、それぞれが、総合的視野に自らの研究を位置づけようとして書かれている。まず、第一編の明治前期の国立銀行(杉山和雄氏)においては、国立銀行にかんする資・史料の発掘の進展にとまぬい、国立銀行を典型的・抽象的に把握することをさき、資料による実証的究明を志向されている。とくに、第一章、銀行局年報の分析は、統計的、計数的な分析から、国立銀行の資産構成、手形取扱状況をみ、地域的な金融の集中をあきらかにされ、第二章、第三章は、それぞれ、特異な産業の連関のもとでの国立銀行業務の動態を、福島第七国立銀行、横浜第七十四国立銀行の事例に即して分析されている。いわば、第一章に対する構造的分析となり、生産・流通の両過程と金融との結合の形態を、きわめて実証的にあきらかにしている。

第二編明治期日本銀行の発行制度(渡辺佐平氏)は、中央銀行としての日本銀行の成立の事情と、発行制度との関連を歴史的にたどり、とくに、金融政策の政策主体のこれをめ

ぐる論議に注目され、比例準備制度から屈伸制限発行制度としての確立と、保証準備発行への移行過程をあきらかにし、産業資本の確立と、政府を通じての発行制度への圧力という点から、わが国中央銀行の歴史的特殊性さえうかがひあがらせている。

以上二つの論文をとおして、明治前期における金融制度の中心としての日本銀行と国立銀行とが、きわめて資本主義化の特性に左右されつつ、発展していったことがあきらかになる。また、地方国立銀行にみる業態の著しい地域的な差異と、中央銀行の歪んだ発展のうちですでに、今日の金融体制の特異性をみることもできるであらう。(東洋経済新報社・一九六五年十二月刊・A5・二〇八頁・九五〇円) —飯田裕康—

大野英二著

### 『ドイツ資本主義論』

本書は、戦後わが国における西欧各国金融資本の成立過程の本格的研究のいわば先端をきつて、さきに『ドイツ金融資本成立史論』(一九五六年刊)をものされた著者が、そこで

明らかにした「ドイツ金融資本の成立過程の基本線」を、「ドイツ資本主義の再生産構造のうち位置づけて」、その「支配の歴史、規定性、如何を問う課題」に対して、「決着をあたえ」た力作である。したがってその「主題は帝制ドイツの社会構成の歴史的规定性を明らかにする点」におかれ、本書は、この主題をめぐって著者が前著公刊以後発表された諸論文を、「あたらしい研究成果を吸収」して「加筆と補筆」を加えながら、三部に分けて配列するという形で構成されている。その叙述は、著者自身の表現を借りれば、「時期的にはビスマルク・レジームを越えて、発生史の追跡を試みたり、あるいは発展傾向の展望をあたえたりして、かなり広汎にわたっている」が、あくまでも一貫して右の主題を追求することによって統一された、みごとな体系的研究成果である。

まず序論で、A 独占資本の発達と帝国主義、B 経済恐慌、C 階級闘争の深刻化と資本主義の「全般的危機」につながる「危機の社会的基盤」を明らかにし、第一部基幹産業分析では、オーベル・シュレージエン製鉄業の創出過程(第一章)と再編過程(第二章)、

G・M・マイヤー著  
麻田四郎・山宮不二人訳

『国際貿易と経済発展』

およびライン・ヴェストファーレン製鉄業における「混合企業」の創出(第三章)が分析され、その上に「産業資本と銀行資本」との関係を示す「ドイツ金融資本の独占機構」(第四章)と、「占領政策とルール重工業の再編過程」(第五章)が明らかにされる。第二部労働関係分析では、ベルリン機械工業における労働関係(第一章)、ルール炭鉱業における労働力の存在形態(第二章)と労働問題(第三章)がとりあげられた後に、「ドイツ石炭鉱業における賃金形態がG. G. G. (鉱山業の坑内作業における出来高賃金ないし請負賃金)を通じて究明される。第三部政策分析では、ドイツ帝国主義と財政改革問題(第一章)、および「転換期のドイツ経済政策——『結集政策』と自由思想連合——」(第二章)をとりあげながら、「ドイツ・ブルジョアジーの類型的特質」を捉え、エルベ河以西(西ドイツ)と以東(東ドイツ)における経済構造——資本類型と循環の特質を類型化しながら、ドイツにおける帝国主義論展開の現実的基盤を明らかにしている(第三章)。(未来社・A 5・P. 144頁+Korrig. 一八〇〇円)

—常盤政治—

不可能であり、是非本書の一読をすすめるものであるが、ただ着目さるべき点を二・三列挙しておきたい。

まず比較生産費理論の動態化のこころみについては、ヒックス・ジョンソン流のバイアス論を用いての展開であり、説明の明快さをのぞけばさしたる新味はない。第二に、交易条件についても、(1)経済発展と交易条件の関係、(2)交易条件変動の厚生の意味、(3)低開発国交易条件の長期的悪化傾向、の三つについて伝統的理論の立場およびバイアス論を用いて反論を加えており、これまた周知のものが多し。第三に、対外均衡では、経済発展の貿易収支に対する影響が分析され、低開発国では国内の貯蓄供給を増大することが期待できず、外資導入の必要性が強調されている。第四に、外国資本においては、低開発国の経済発展という見地から、外国資本の利益・不利益が分析されており、従来のトランスファー理論とはことなり、生産資本と発展諸力との相互関連につき、興味ある分析が行なわれている。

また政策的問題については、これ迄展開されてきた種々なる保護貿易主義の主張に理論的・現実的反論を加え、それらが非常に限ら

一九六〇年代は南北問題の時代であるといわれ、一九六四年に開催された第一回国連貿易開発会議における論議に象徴されるように、本書のテーマたる国際貿易と経済発展の問題は、現在の関心の焦点となっている。それ故に、これ迄にも数多くの文献が存在し、夥しい研究が行なわれてきたが、むしろ雑多な見解が打ち出され、混乱・混迷の感を強くするばかりであった。

これに対して、本書は、これらの夥しい文献・研究を、一つの理論の筋を通して、整理・体系化し、この問題に対する一つの明確な方向づけを与えたという意味で、注目されるのである。すなわち古典派の国際貿易理論を基礎に、その展開・拡張として、経済発展と貿易のほとんどすべての問題が解明可能であり、従来これら理論に対してなげかけられてきた反論・批判がいかに誤解にもとづき、的はずれのものであるかを明示しているのである。

れた場合のみ、支持されるのであり、その有効性は大いに疑問視されるのである。最後に貿易を通じる発展では、従来の貿易を通じて、低開発国の経済発展が行なわれるとする著者の積極的展開がなされている。問題は、貿易の発展効果をさまざまの多くの阻害要因(市場の不完全性と社会的・文化的・政治的硬直性)を排除し、その効果を高めるような政策をとることであり、「したがって、貿易の利益が成長の利益と調和し一体化するか否かは、結局のところ、一国が、いろいろな国内政策を有効に駆使して、経済変動ばかりでなく、社会的・政治的変動をひきおこし、そして、貿易の発展促進作用に対してその国の経済をより敏感に反応させることができるか否かにかかっているのである。」(二三九頁)すなわち基本的には、経済構造全体の転換能力が問題にされねばならないのである。

このような本書の伝統的理論を基礎におく一貫した立場からの展開・整理に関し、批判された側からの反批判・反論が当然多くの人々からなされるであろう。しかし伝統的理論ののつとり、それを積極的に展開し、現在の緊急な問題に解答しようとし、また十分にその理論が有効であることを示された本書の基

著者は「古典派の伝統に立つ理論が発展問題について妥当性と現実性にかけるという一般の批判に対して、わたくしは承服できない。それどころか、貿易と発展の関係に関する最も適切な命題は、伝統的貿易理論と密接に結びついているのである。もし古典派理論の静態的仮定をゆるめて、必要な諸変数を加えるならば、伝統的貿易理論は、いぜんとして発展問題の解明に有効な基本原理となりうるであろう」(序文V)との基本的立場から、国際貿易の純粋理論と貨幣理論の主要な問題を発展の国際的意義という観点から再検討している。ただここで採用されているのは、大体において比較静学的手法であり、変動過程の時間的経路を分析するといった真の動学理論ではない。

本書は、第一章序論、第二章比較生産費、第三章交易条件、第四章対外均衡、第五章外国資本、第六章貿易政策、第七章貿易を通じる発展、より構成されているが、それらは、五章までの古典的貿易理論の発展問題への拡張的適用のこころみと、六章以降の著者のきわめて積極的・論争的な政策的提言、積極的主張とに大別される。

勿論、各章各内容の詳細に立ち入ることは

本的方向には、多くの人々が賛意を表するにちがいないと確信される。

一方から他方へのウェイトの極端なかつ急激な移動には問題があるが、伝統的理論の意義とその有用性を明確化した点で、本書の価値は高いのであり、訳文も簡明であり、多くの人々の一読を心から推奨する次第である。現在のところ、かかる反省に基づいての新しい展開・深化がとくに期待されているといえるのではなからうか。(ダイヤモンド社・一九六五年十一月刊・B 6・二七五頁・六八〇円)

—深海博明—

宮本又次著  
合田裕作

『経済変動の歴史的研究』

今日、経済史では、発展を、それ自体に内蔵する諸矛盾の相剋に求めない。何か一つ、起動的要因を所与のものとして、発展を、その影響のなかで眺めようとする立場が一般化しつつある。新しい型の経済史の誕生であった。その間に、著者らが果たした先駆的役割